

【研究ノート】

# 阿含・ニカーヤに見る六師外道の伝承について

辻 本 俊 郎

*Dīgha-nikāya*（長部）第二經『沙門果經』（*Sāmaññaphalasutta*）には仏教興期時代に活躍した自由思想家を代表する、いわゆる六師外道の名とその説が伝承されている。<sup>(1)</sup> その六師とは、

- （１） プーラナ・カッサバ（Pūraṇa Kassapa, 道德否定論）
- （２） マッカリ・ゴーサーラ（Makkhali Gosāla 決定論）
- （３） アジタ・ケーサカムバリン（Ajita Kesakambalin, 唯物論）
- （４） パクダ・カッチャーヤナ（Pakudha Kaccāyana, 七要素説）
- （５） サンジャヤ・ベーラッティプッタ（Saṅjaya Belaṭṭhiputta, 懷疑論）
- （６） ニガンタ・ナータプッタ（Nigaṇṭha Nātaputta, ジャイナ教）

である。六師外道のもつ思想や思想史的意義の重要性はここで改めて述べるまでもない。

彼らは僧団（saṃgha）を有し、衆（gaṇi）を有し、衆の師（gaṇacariya）であり、知識ひろく名声高い教祖であり、多くの人々によって尊敬されていた。

小論では、六師の思想的研究に対して新しい見解を提出するものではないが、六師の伝承、特に、六師の配列パターンに関して一考察を試みる。

六師の配列パターンに関する従来の研究では、南清隆氏の論考がある。<sup>(2)</sup> 南氏の研究によれば、その配列パターンには大別して二種類があるとする。それは、（１）パーリ伝『沙門果經』、漢訳『沙門果經』（佛陀耶舎共竺佛念訳）や異訳『寂志果經』（曇無蘭訳）にみられる配列パターン、すなわち、

- ① プーラナ・カッサバ
- ② マッカリ・ゴーサーラ

- ③ アジタ・ケーサカムバリン
- ④ パクダ・カッチャーヤナ
- ⑤ サンジャヤ・ベーラッティプッタ
- ⑥ ニガンタ・ナータプッタ

の順と（２）主に有部系の文献に見られるもので、

- ① プーラナ・カッサパ
- ② マッカリ・ゴーサーラ
- ③ サンジャヤ・ベーラッティプッタ
- ④ アジタ・ケーサカムバリン
- ⑤ パクダ・カッチャーヤナ
- ⑥ ニガンタ・ナータプッタ

という順であるとする。さらに、南氏は六師の配列パターンについて「幾人かの名前を列挙する際、呼び易い配列というものがいつしかパターン化されるという現象は有りうべきものであろうから、六師の列挙にも一定の順が存在していたとしても不思議ではない」とみる。

さて、パーリ伝では、南氏の指摘の如く、六師の名は、*Majjhima-nikāya*（中部）第30経『チューラサーローパマスutta』(*Cūlasāropamasutta*)<sup>(3)</sup>、第36経『マハーサッチャカ・スutta』(*Mahāsaccakasutta*)<sup>(4)</sup>、第77経『マハーサクルダーイスutta』(*Mahāsakuludāyisutta*)<sup>(5)</sup>、『スutta・ニパータ』(*Sutta-nipāta*)<sup>(6)</sup>、『ヴィナヤ』(*Vinaya*)<sup>(7)</sup>、『ジャータカ』(*Jātaka*)<sup>(8)</sup>などにも見られる。そこでは、六師の配列順は、パーリ伝『沙門果経』、漢訳『沙門果経』と全く同じである。例外として、ニカーヤにおいて *Samyutta-nikāya*（相應部）『コーサラ・サムユッタ』(*Kosalasamyutta*)<sup>(9)</sup> などでは、

- ① プーラナ・カッサパ
- ② マッカリ・ゴーサーラ
- ③ ニガンタ・ナータプッタ
- ④ サンジャヤ・ベーラッティプッタ
- ⑤ パクダ・カッチャーヤナ
- ⑥ アジタ・ケーサカムバリン

と、その配列パターンは崩れるのであるが、しかし、およそパーリ伝、すなわち、南方上座部では、主に

- ① プーラナ・カッサバ
- ② マッカリ・ゴーサーラ
- ③ アジタ・ケーサカムバリ
- ④ パクダ・カッチャーヤナ
- ⑤ サンジャヤ・ベラッティブッタ
- ⑥ ニガンタ・ナータブッタ

の配列パターン（以下、パターン A とする）を有しているとみて差し支えないと考えられる。

これに対して、北伝、すなわち、阿含經において六師の配列パターンはどのようなになっているのであろうか。

『長阿含經』では『遊行經』<sup>(10)</sup>、『沙門果經』<sup>(11)</sup>に見られる。すなわち、『沙門果經』では、

- ① 不蘭迦葉（プーラナ・カッサバ）
- ② 末伽梨瞿舍利（マッカリ・ゴーサーラ）
- ③ 阿耨多翅舍欽婆羅（アジタ・ケーサカムバリ）
- ④ 婆浮陀伽旃那（パクダ・カッチャーヤナ）
- ⑤ 散若夷毘羅梨沸（サンジャヤ・ベラッティブッタ）
- ⑥ 尼乾子（ニガンタ・ナータブッタ）

そこでは、南方上座部のパターンと一致している。すなわち、*Dīgha-nikāya*（長部）、『長阿含經』ともにパターン A を採るのである。

『中阿含經』（僧伽提婆訳）では、『箭毛經』<sup>(12)</sup>にみられる。そこでは、

- ① 不蘭迦葉（プーラナ・カッサバ）
- ② 摩息迦利瞿舍利子（マッカリ・ゴーサーラ）
- ③ 婆若鞞羅遲子（サンジャヤ・ベラッティブッタ）
- ④ 尼捷親子（ニガンタ・ナータブッタ）
- ⑤ 彼復迦梅（パクダ・カッチャーヤナ）
- ⑥ 阿夷哆難舍劍婆利（アジタ・ケーサカムバリ）

の配列パターン（以下、パターン B とする）であり、南方上座部、『長阿含經』におけるパターンと異なっている。

『雜阿含經』（求那跋陀羅訳）<sup>(13)</sup>では、

- ① 富蘭那迦葉（プーラナ・カッサバ）

- ② 末迦梨瞿舍利子（マッカリ・ゴーサーラ）
- ③ 先闍那毘羅胝子（サンジャヤ・ベラッティブッタ）
- ④ 阿耆多翅舍欽婆羅（アジタ・ケーサカムバリン）
- ⑤ 迦羅拘陀迦梅延（バクダ・カッチャーヤナ）
- ⑥ 尼捷陀若提子（ニガンタ・ナータブッタ）

の配列パターン（以下、パターンCとする）であり、アジタ・ケーサカムバリン、ニガンタ・ナータブッタの位置が入れ替わっているものの『中阿含經』におけるパターンとほぼ一致しているといえる。

『増一阿含經』<sup>(14)</sup>（僧伽提婆訳）では、

- ① 不蘭迦葉（プーラナ・カッサパ）
- ② 阿夷耑（アジタ・ケーサカムバリン）
- ③ 瞿耶樓（マッカリ・ゴーサーラ）
- ④ 波休迦梅（バクダ・カッチャーヤナ）
- ⑤ 先比盧持（サンジャヤ・ベラッティブッタ）
- ⑥ 尼捷子（ニガンタ・ナータブッタ）

の配列パターン（以下、パターンDとする）となっており、南方上座部、『長阿含經』におけるパターンに対して、後三師は一致しているが、前三師の順に異なっており、さらには、『中阿含經』や『雜阿含經』におけるパターンとも異なっている。

このように六師の配列パターンは、『長阿含經』、『中阿含經』、『雜阿含經』、『増一阿含經』それぞれ一種ずつ、すなわち、阿含經では四種類に分類することができる。その要因を推測するに現存の阿含は『長阿含經』、『中阿含經』、『雜阿含經』、『増一阿含經』それぞれ帰属部派を異にしている。そのため、四種類の異なった配列パターンが生じたのではないか。つまり、部派ごとによって異なった六師の配列パターンを有していたのではないかと推測できる。そこで、現存の阿含經と帰属部派との関係を見ると次のごとくである。<sup>(15)</sup>

- 『長阿含經』 ； 法藏部
- 『中阿含經』 ； 說一切有部
- 『雜阿含經』 ； 根本說一切有部
- 『増一阿含經』 ； 帰属部派不明

これに現存の阿含經の帰属部派と六師の配列パターンを組み合わせると次のようになる。

- 南方上座部           ； 配列パターン A  
 法蔵部               ； 配列パターン A  
 説一切有部          ； 配列パターン B  
 根本説一切有部   ； 配列パターン C

今、パーリ伝、漢訳ともに經に見られる六師の配列パターンを見たが、この他に六師を伝承し、かつ、帰属部派の明確な資料を見ると、上記の四阿含のほかに、六師の伝承が『別訳雜阿含經』にも見出せる。『別訳雜阿含經』の帰属部派は根本説一切有部であると考えられている。そして、『別訳雜阿含經』(失訳)<sup>(17)</sup>に見られる六師の配列は、以下の通りである。すなわち、

- ① 富蘭那迦葉 (プーラナ・カッサパ)
- ② 末伽梨俱睺梨子 (マッカリ・ゴーサーラ)
- ③ 刪闍耶毘羅邸子 (サンジャヤ・ベーラッティブッタ)
- ④ 阿闍多翅舎欽婆羅 (アジタ・ケーサカムバリン)
- ⑤ 迦據多迦栴延 (バクダ・カッチャーヤナ)
- ⑥ 尼乾陀闍提弗多羅 (ニガンタ・ナータブッタ)

配列パターン C をとるのである。

さらに、阿含だけでなく律にも六師の伝承が見られるのである。

法蔵部所伝である『四分律』(佛陀耶舎共竺佛念訳)<sup>(18)</sup>では、配列パターン A をとり、法蔵部所伝である『長阿含經』の配列パターンと一致するのである。この他、法蔵部所伝とされている『仏本行集經』(闍那崛多訳)<sup>(19)</sup>も全同である。それ故、法蔵部は六師の名を列挙する際、パターン A をもって示していたと考えられる。

説一切有部所伝である『十誦律』(弗若多羅共鳩摩羅什訳)<sup>(20)</sup>では、配列パターン B をとり、説一切有部所伝である『中阿含經』の配列パターンと一致し、説一切有部ではパターン B を有していたといえる。

根本説一切有部所伝である『根本説一切有部毘奈耶』(義浄訳)<sup>(21)</sup>や『サンガベーダヴァスツ』(Samgahabhedavastu)<sup>(22)</sup>、その漢訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(義浄訳)<sup>(23)</sup>、『根本説一切有部毘奈耶雜事』(義浄訳)<sup>(24)</sup>では、配列パターン C をとり、根本説一切有部所伝である『雜阿含經』、『別訳雜阿含經』の

配列パターンと一致するのである。さらに、根本説一切有部所伝である『ディヴィヤヴァダーナ』(*Divyavadāna*)<sup>(28)</sup>も配列パターンCをとる。それ故、根本説一切有部では配列パターンCをとることは首肯されてよいのではないか。

このように、ニカーヤ、阿含経、律などに見られる六師の配列パターンを見てきたが、次のような結果が得ることができたと思う。

南方上座部       ； 配列パターン A.

法蔵部           ； 配列パターン A.

説一切有部       ； 配列パターン B.

根本説一切有部 ； 配列パターン C.

このようにニカーヤ・阿含、ひいては律においても、部派によって六師の配列パターンが異なるということが明らかとなった。また、六師の配列パターンはニカーヤ・阿含経ではおよそ大別して四種にわけることができる。その中でその原型はパターン A ではないかと考えられる。その理由は、

- (1) 南方上座部、法蔵部の二派に伝承されていること
- (2) 南北両伝に伝承されていること
- (3) パターン A は、六師を最も詳細に伝えているパーリ伝『沙門果経』、漢訳『沙門果経』、異訳『寂志果経』に共通であること
- (4) 最古の仏教聖典の一つに数えられている『スッタ・ニパータ』第四章にもパターン A の配列が見られること

などからも窺えるのではないだろうか。

※パーリ語テキストは、パーリ聖典協会 (Pali Text Society. 略称 PTS.) 刊行のものを用了。また、漢訳経典は『大正新脩大蔵経』を用了。

#### 〔註〕

- (1) 「六師外道」全般にわたる研究として主なもの (国内に限る) は次の通り。  
 宇井伯寿「六師外道研究」(『印度哲学研究』第二巻、甲子社書房、1925、後岩波書店)  
 雲井昭善『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店、1967。  
 高木神元『初期仏教思想の研究』高木神元著作集第三巻、法蔵館、1991。  
 中村元『思想の自由とジャイナ教』中村元選集第10巻、春秋社、1991。な

ど。

- (2) 南清隆「パーリ「沙門果経」の六師外道について」『印度学仏教学研究』, 32-1.
- (3) *Majjhima-nikāya*, vol. 1, p. 198.
- (4) *Majjhima-nikāya*, vol. 1, p. 250.
- (5) *Majjhima-nikāya*, vol. 2, p. 2.
- (6) *Sutta-nipāta*, p. 92.
- (7) *Vinaya*, p. 111.
- (8) *Jātaka*, vol. 1, p. 509.
- (9) *Samyutta-nikāya*, vol. 1, p. 68, vol. 4, p. 398.
- (10) 大正 1, 255 a.
- (11) 大正 1, 107 b-c.
- (12) 大正 1, 782 a, 782 a-b, 784 a.
- (13) 大正 2, 31 c, 253 b, 317 b, 334 c.
- (14) 大正 2, 727 c, 752 b, 762 a-b.
- (15) 榎本文雄「初期仏教思想の生成—北伝阿含の成立」岩波講座・東洋思想, 第八卷『インド仏教』1, 岩波書店, 1988. を参照されたい。
- (16) 榎本前掲論文参照。
- (17) 大正 2, 391 c, 413 b-c.
- (18) 大正 23, 791 b, 946 b.
- (19) 大正 3, 827 a-c.
- (20) 大正 23, 268 c.
- (21) 大正 23, 692 b-c.
- (22) Raniero Gnoli, *The Gilgit Manuscript of the Saṃghabhedavastu*, Being the 17 th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin, Part II, Roma 1978, p. 217.
- (23) 大正 24, 107 a.
- (24) 大正 24, 329 a, 396 b.
- (25) E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886; Reprint Amsterdam: Oriental Press / Philo Press, 1970. p. 143.